

鷹巣誠一原案 片山洋子脚色 「男ってどうして?!」

(効果音) (教室のガヤ)

野口弘子ナレーション ここは青春高校1年B組。あ、わたし？ 名前は野口弘子。ごく普通の女の子。今日のドラマの主人公なの。さて、“女の子が3人寄ればなんとか”っていうけど、今、わたしたち、男子諸君にはちょっと聞かせられない話に熱が入っているのです。え、聞きたい？ どうしても？ じゃ、ちょっとね。

武井優季 えー、ウツソー！ 絵美、あんたさ、ちょっと変態なんじゃない？

白石絵美 何よ、優季。女の子ってかわいいじゃん。細かいところに気はつくし、相手の気持ちを大切にしてくれるし、いじらしいんだよね、ほんと。

優季 ちょっと、それが女の言うセリフ？ ヤバい世界なんじゃない？ ねえ、弘子。

弘子 ん、うーん。まあ同性のほうが分かり合える部分っていうのは多いかもしれないけどねえ。

絵美 しかしね、男は、どこか嫌らしさが漂ってるよ。そう思わない？

優季 そ、はっきり言って、スケベなのよね。それに自分勝手だし、ヘンなところで鈍感だし。男ってどうしてあんなんだろ。

絵美 だから女の子のほうがいいんだよ。弘子の彼は？ ほら、G組の山田君。山田君とはどこまで行ってんの？

弘子 ヤだあ。わたしたち、そんなんじゃ…。

優季 弘子たちは、純潔なんだもんねえ。窓から山田君の姿を見ているだけで幸せなんだって。ね、弘子？

弘子 うん。あの人を見ていられるだけでいいの、わたし。

絵美 わ！ “あの人”と来た。あ、そうだ、山田君て言えば、この間 茶店でさ、タバコ吸ってたよ。ハンドボール部の仲間たちと。意外だったな。

弘子 タバコ?! タバコ…。

ナレーション ショックでした。山田君がタバコを吸うなんて。

(効果音) (電話のベル)

弘子 はい、野口です。あ、山田君？

山田和夫 (フィルター音) 今日も部活で遅くてさ、会えなくてごめんな。

弘子 ううん、いいの。

和夫 (フィルター音) どうしたの？ 元気ないね。

弘子 別に。

和夫 (フィルター音) 何かあったの？

弘子 …あのさあ、山田君さあ。

和夫 (フィルター音) なんだよ、改まって。

弘子 …タバコ、吸ってるの？
和夫 (フィルター音)ん？ なんだ、そんなこと。ああ、夏の合宿で、先輩からやらされちゃったよ。ま、あれくらいはね。みんなやってるんだから。

弘子 タバコくらいは吸ってもいいんだ。わたしが吸ってもいいわけだ。
和夫 (フィルター音)お前は女じゃないか。女がフカしてるのは、あんまりよくないよ。

弘子 どうして？ 男はよくて女はダメ？
和夫 (フィルター音)なんだよ、こんなことで。
弘子 “こんなこと”？ もういい、やめよ、この話。
和夫 (フィルター音)おれは男なんだからさ。立場が違うんだよ。
弘子 もういいんだってば！
ナレーション 付き合って1年、初めてのケンカです。後味の悪い別れ方をしてしまいました。でも、このごろの山田君、少しヘンなんです。わたしたち、交換ノートつけてるんだけど、山田君の書いた詩の中に、「お前の隣に寝たい」ってところがあったの。わたしがそれを「“眠りたい”の間違いでしょ？」って言ったら、ちょっと考えて、「いや、やっぱり“寝たい”だよ」って言うんです。これは、“もしかしたら…”って思ったけど、もしかするのかなあ…。

(効果音) (クラスのガヤ)
絵美 ワウ！ 優季、やったじゃん。わたしたちの中で一番乗りだね。
弘子 ほんとなの、優季？ 初体験したの？
優季 ウフン。そ、あいつにあげちゃった。ね、弘子。次はあんたの番よ。いつまでも“ぶりっ子”しないで、正直にぶつかってみれば？ あんただって、内心は“してみたい”って思ってるんでしょ？

弘子 わたしは、そんな…。
優季 いいって、ムリしなくても。みんなそうなんだから。まして、山田君は男なんだから、もっと我慢してるはずよ、きっと。

弘子(モノローグ) みんな、そう？ わたしも？ うん、そんな気持ち、どこかにあるね。あの人がわたしの手や肩に触れただけで、ドキドキしちゃうもの。だけど、体で感じることが一番なのかな？ なんだか後ろめたい気がするけど。“正直にぶつかる”っていったって…。

(音楽) (ブリッジ)
男子 A おい、山田。彼女が待ってるぜ。
男子 B (外に)弘子さーん、今すぐ行かせるからね。部室の外で寒いけどねえ。
弘子 (オフ)あ、いえ、大丈夫で一す。
男子 A いいなあ、お前。素直な彼女でさ。
男子 B ほんとほんと。うらやましいスねえ。どこまで行ってるんですか、お二人さん

は？

男子 A まさか、1 年も付き合ってた、まだプラトニックラブってこともないんだろ？

和夫 ああ、今日からはな。

男子 B はん？ “今日からは”？

男子 A あ、な一るほど。そういうことか。

和夫 じゃ、明日な。

(効果音) (雨の音)

(音楽) (谷村新司「秋止符」)

弘子 この間はごめん。

和夫 ああ。

弘子 もう怒ってない？

和夫 ああ。

弘子 …どうして黙ってるの？

和夫 …弘子、おれのこと、好きか？

弘子 もちろんよ。

和夫 本当に好きか？

弘子 うん。いつも一緒にいたいと思ってる。山田君のためなら、どんなことでも我慢で来ちゃう。

和夫 弘子。

ナレーション 一瞬、“あ、来た”と思った。歴史的なファーストキスの瞬間。でも、そのあとのことが頭をよぎって、わたしは思わず彼を拒んだ。

和夫 どうしてだよ、弘子。どうして？

弘子 ごめんなさい。でも分かって。今はまだできない。今はまだ…。

和夫 分からないよ。好きなんだろ？ 今好きなんだよ、おれだって。だからお前が欲しいんだ。今、今だよ。

弘子 できない。今はダメ。ダメよ。

和夫 分かったよ。勝手にしろよ！

弘子 山田君！

弘子(モノローグ) あの人の寂しそうな後ろ姿。怒る顔なんて見たくなかった。できれば喜ばせてあげたい。でも、そういうことじゃないと思うの、これは。わたし、間違ってる？ あー、でも山田君が離れていってしまったらどうしよう。どうしたらいいの？

(多重エコー)

ナレーション 次の日、重い気持ちで学校へ行くと――。

絵美 弘子、弘子、大変だよ。

弘子 どうしたの？

優季 “どうしたの”はこっちのセリフよ。

男子 A 昨日、山田とケンカでもしたのか？
弘子 え？ 別に。どうして？
絵美 見ちゃったんだって、部室で。ね？
男子 B ああ。実はさ、夕方、忘れ物を取りに戻ったんだよね。そしたら、雨でぬれてる山田をマネージャーの宮本麻依子が、タオルでふいててさ。なんか、怪しい雰囲気だったぜ。

弘子(モノローグ) あのあとだ。そんな…。

男子 A 男はそういうのに弱いんだよな。ガククリ来てるときにさ、優しくされたりすると、ついムラムラっと…。

絵美 バカ。一言多いんだよ、全く。
優季 あ、弘子、どこ行くの？
弘子(モノローグ) ウソ、ウソでしょ、山田君。わたしたちの愛って、そんな薄っぺらなものじゃないわよね？ わたし、信じてる！

(効果音) (人とぶつかる)
弘子 あ、イタ！ すみません。
田村先生 おっとー。前方不注意だね。あら、野口さん、ちょうどよかったわ。
弘子 は？ なんですか、田村先生。
田村先生 今、君の彼氏がわたしの保健室で寝てるのよ。
弘子 えー！ 一体どうしたんですか？
田村先生 大したことないの。肩をどこかにぶつけて、ねんざしただけ。
(音楽) (ブリッジ)
田村先生 さ、お入んなさい。あらら、山田君たら、眠っちゃってるわ。無邪気なもんねえ。
ナレーション この保健の田村先生は、クリスチャンでした。姉御タイプで、言うことが荒っぽいけど、なんかあったかくて。だからかな、山田君が目の前にいることも手伝って、なんだかほっとしたら涙が出てきてしまいました。それから、今日までの彼とのこと、恋愛について、性について、全部先生に話しました。

田村先生 そうか、うん。わたしにも覚えがあるなあ。結局、山田君は男であんたは女だったことだ。

弘子 え？
田村先生 ん？ (笑いながら) 当たり前だね。だけど不思議ね。神様はどうして男と女を違う考え方をする者同士につくられたのかねえ。しかも、その“男女が愛し合うように”って教えてる。“君のくぼみは僕の出っ張り”ってやつだね。

弘子 ヤだ、先生。
田村先生 ね、野口さん。“恋”はだれにも、そ、動物にだってできるけど、“愛する”って子とは、恋とは違うのよ。そう思わない？ 愛することには、能力が必要なのよね。

弘子 愛する、能力？

田村先生 そう。“資格”って言うてもいいかな。“恋”は燃え上がって消える感情だけど、“愛”は、お互いの間に芽生えて、成長していくもんでしょ？ 愛し合う二人には、お互い感情もあれば、理性もある。しかも男と女ではそれぞれに違う。“愛”ってのはさあ、その違いを在りのままに受け入れて、相手を大切に想う気持ち。相手がいとおいしいからこそ、自分中心の思いを我慢する“勇氣”よ。これは性の問題でも言えるね。本当に相手のこと人格として愛するなら、一時的な衝動をじっとこらえる。野口さん、男の子は特にこれが強いから、これを抑えるって大変なことなの。そこをよく分かってあげて、山田君にも別の面で優しくしてあげてよね。彼のあんたに対する気持ちがほんとに“愛”なら、あんたの、そして二人の将来のために、待つことができるはずよ。それができなきゃ、人を愛する資格なんかない。分かった、山田君？ ほら、いい加減寝たふりはやめて、起きてらっしゃい。

和夫 あれー、先生、分かったの？

弘子 山田君！ もう、ズルいんだから。(和夫を軽くぶつ)

和夫 イテ、いてえよ。ねんざしてるんだぞ。分かった。悪かった、ごめん。

田村先生 (笑い) その辺で赦してあげなさい。最後にひと言。聖書にね、「人が愛する友のために命を捨てる、これより大きな愛はない」って言葉があるのよ。愛するってことは、自分の全存在をかけて、相手を生かすことじゃないかな。

(音楽) (BGM)

弘子 …すごい。感動。もしかしてそれ、先生がだんな様に対して思ってること、ですか？

田村先生 オブコース！ もっとも、そう思ってるだけで、現実には落第点スレスレだけどね。でも主人もわたしも、人間不信で心の中ズタズタになってた時に、イエス様信じて、救われて結ばれたのよ。お互い欠けだらけでも、神様に愛されてるから、どんな時でも相手の愛を信じられる。これは感謝よ！

ナレーション わたしも、そんな愛を持ちたい。「神様、愛をください。」そう心の中でつぶやきながら、わたしはそっと山田君の横顔をのぞき込んだのでした――。

<完>